

「美・知・徳を兼ね備えたデウスさま」

脇 本 由 佳

・・・聴講生時代、女友達と冗談混じりに、こうお噂していました。岡道男先生のことです。

わたしが修士の頃だったでしょうか。今も記憶の中に鮮烈に残っている、小さな出来事があります。岡先生の研究室でのことでした。（今となっては懐かしい、旧本館の研究室です）。岡先生以外にその場に居合わせたのは、わたしを含めて二、三名だったように思います。

雑談をしていて、なぜかうつ病についての話題になりました。そういう病気の人是不眠症に陥ることも多く、苦しさのあまり薬を飲んで、その薬の副作用によってまた苦しむ、という悪循環を繰り返すことがあるそうです。誰かが、そういう人は眠れないからといってすぐ睡眠薬を飲んだりするのが良くない、というようなことを言いました。

するとその時、岡先生がこうおっしゃったのです。

「いや、あれは、なったことのある者でないと解らない。その時には本当に、今寝ないと死ぬような気になるんだ。」

このお言葉に、わたしは強いショックを受けました。こういうお言葉をもらされたということは、岡先生もまた、余程不眠に苦しまれた御経験がおありなのか、と拝察し、驚いたのです。岡先生はわたし達にはまさに、「神様」のように映っていたからです。

先生は御自身の御苦勞は、殆ど人前ではお見せになりませんでした。頼りないわたし達は、始終先生に甘えていたと思います。先生はそんなわたし達を決して拒まれず、必ず救いの手を差し延べて下さり、多くの貴重なお時間を割いて下さいました。

この文の最初に、「美・知・徳」のふざけたような話を持ち出しました。岡先生は本当に、わたしの目には、浮世離れのした神様のよう映っていました。が、研究室でのこの小さな出来事を思い出す時、岡先生はあらゆる「善きもの」のほかに、人知れぬお苦しみというものも、きっと併せ持っておられたのだ、と思えるのです。そして、だからこそ、どなたに対してもあんなにもお優しくした岡先生だったのでしょうか。

わたし自身、勿論、先生からは語り尽くせない程の御恩を受けました。御講義においてだけでなく、様々な機会に、先生にお助け頂きました。論文を書いてお見せすると、そのつど、非常に細かく丁寧な御注意を頂きました。それは時には辛いものでもありましたが、その御注意をよく考えて書き直すと、殆ど必ず「前より良くなった」と言って頂けました。学会発表のテーマで悩んでいた折、御自宅にお電話して一時間ほど御相談申し上げましたが、先生は御多忙にもかかわらず丁寧にお答え下さり、アドバイスを下さいました。予備発表が終わった後（この時は残念ながら御出席頂けませんでした）、原稿をお送りしてお読み頂いたところ、とても長い御批判・御注意のお手紙を頂き、一瞬、目の前が真っ暗になりました。でもその御批判にお応えするべく、自分なりに一生懸命考え、手直しして本番に臨んだところ、「前に読んだ時よりずっと良くなっていた」とおっしゃって頂けました。あの時の嬉しさは、今も忘れられません。軽い気持ちで御質問しただけでも、わざわざお調べ下さり、お手紙を下さったこともあります。これらのことは、先生がして下さった事全てのほんの僅かな例に過ぎません。岡先生にまつわる良き思い出は数知れぬほどあるにもかかわらず、この小文の初めに記した小さな出来事を思い出した時、なぜか最も痛切に、岡先生を喪った哀しみが、身に沁みて実感されてなりませんでした。それがなぜなのか、自分でも解りませんでした。

わたしの或る友人が、手紙の中でこう、説いてくれました。「・・・本当に慕っている人が亡くなった場合は、あまりにもショックが大きすぎて呆然としてしまって、かえって実感が湧かないものかもしれない。後になってふとしたきっかけで実感が生じ、その人にはもう二度と会えないということが日を経るごとにゆっくりとわかり始め、当たり前のように繰り返されていた日常が二度と戻って来はしないということがわかるようになって初めて、悲しみが感じられるのだろう・・・」

わたしはまさにこの通りのことを、経験したのです。亡くなられた当初は、信じられませんでした。日を経てのち、あの小さな思い出が胸に呼び起こされた時に突然、実感が湧き起こり、もう二度と再びお目にはかかれないという痛みまでの哀しみが胸にあふれて、眠れぬ夜を過ごしました。これからもこの哀しみは、わたしの胸から去ることはないのかも知れません。